夕べの雲　庄野潤三

講談社文庫

夕べの雲

庄野潤三

昭和46年7月1日第1刷発行
昭和53年6月25日第9刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社大進堂

© Junzo Shono 1971
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

夕べの雲

庄野潤三

目次

一章　萩　七
二章　終りと始まり　二三
三章　ピアノの上　四三
四章　コヨーテの歌　六二
五章　金木犀　八二
六章　大きな嚢　一〇三
七章　ムカデ　一二四
八章　山茶花　一四二
九章　松のたんこぶ　一六二
十章　山　芋　一八二
十一章　雷　二〇六
十二章　期末テスト　二三六
十三章　春　蘭　二四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

あとがき　二六七

庄野潤三の文学　小沼　丹　二六九
人と文学について　二六九
「夕べの雲」について　二七七
年　譜　二八六

夕べの雲

萩

「こんなに大きくなったのか」
　庭で大浦がびっくりしたような声を立てた。
　居間の縁側のすぐ前、硝子戸すれすれのところに萩が生えている。三つ、並んで生えていて、まっすぐに伸びた右端のは、もうあと一尺くらいで軒に届きそうだ。
　そこだけ不意に萩の原が出来たみたいであった。
　この萩の前に水道の蛇口があるので、大浦が庭木に水をやる時は、萩の枝をちょっと手でよけるようにして、そこへ入り込まなければならない。それくらいだから、萩が大きくなったことは、彼はとうに承知している。
「どうもいちいち、面倒だな」
　と、枝を手でよける度にそう思う。
　ところが、いま——八月のおわりのよく晴れた朝、仕事部屋から出て来て、萩の茂みを眺めると、大浦はその成育ぶりに初めて気が付いたようにびっくりしたのであった。
　もっとも、この声は家の中にいる家族には聞えなかったらしく、誰も返事をする者はいなかっ

た。細君は風呂場で洗濯物のゆすぎをやっている最中であったし、子供は三人とも勉強部屋に引っ込んでいた。

「どうしてまたこんなに大きくなったんだろう」

相手がいないので、あとはひとり言になった。そうして、少し後ろに下ったり、横に寄ってみたりして、大浦は萩を見ている。

去年は、こんなに大きくならなかった。それも秋のおわりには、すっかり枯れてしまって、大浦の細君が根元からほんの僅かだけ残して枝を全部落してしまったのである。

それがよかったのか、今年になってから目ざましく成長した。去年は何もなかったところに大きな枝が伸びて、風に吹かれると、硝子障子の外側からすうっとなぜる。

昼間、部屋にひとりでいる時にこれをやられると、あまり気味がよくない。いきなり障子の外で大きな影が動くので、人が通ったのかと思う。人といっても、かなりの大男（もしそれが男だとすればであるが）なので、部屋にいる者は、大人であっても子供であっても、どきんとする。

大浦の家族が、男も女も揃って臆病なのかも知れない。まだよその人がこの部屋でひとりきりでいて、これに出会うということがないので、よく分らない。

しかし、そんなところに萩が生えていて、風に吹かれたから枝がゆれたのだという訳を知らない人なら、きっと驚くのではないだろうか。

夜なんか、この枝が網戸の外をひとなぜすると、音がする。テレビの野球を見ているような時でも、どうかした拍子にこの音で、うしろを振り向くことがある。何もびくびくしながら野球を

見ているわけではないのに、何が来たのかと思うのだ。

この萩を近くの山から取って来て、ここに植えたのは、二年前のことだ。それは随分ちっぽけな萩だった。見つけたのは上の男の子の安雄で、あの時はまだ小学五年生であったが、その膝よりもまだ小さかった。

まさかあれがこんなに大きくなるとは思わなかった。

あの時分は（それはこの多摩丘陵のひとつである丘の上の家に彼等が引越して来てから一年経っていた）、早く風よけになる木を家のまわりに植えるのに夢中になっていて、萩だけでなく、この山に自生している山百合や春蘭を移植してみることも間にはあったが、どうしてもそれらの小さな植物は後まわしになっていた頃であった。

何しろ新しい彼等の家は丘の頂上にあるので、見晴しもいいかわり、風当りも相当なものであった。三百六十度そっくり見渡すことが出来るということは、東西南北、どっちの方角から風が吹いて来ても、まともに彼等の家に当るわけで、隠れ場所というものがなかった。

前からこのあたりに住んでいる農家をみれば、どういう場所が人間が住むのにいいか、ひと目で分る。丘のいちばん上にいるような家はどこを探してもない。往還から引っ込んだところに丘や藪を背にして、いかにも風当りの心配なんかなさそうな、おだやかな様子で、彼等の藁葺（わらぶき）の屋根が見える。

農家の人たちがそういう場所を選んで住んでいるということは、この人たちの先祖がみなそう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

して来たことを物語っている。多分、それは人間が本能的に持っていた知恵なのであろう。丘の上がいいか、ふもとがいいかということで迷ったりする者はなかったのだろう。

こういうことを大浦が考えるようになったのは、この家を建ててしまって、家族五人が引越して来て少し経ってからであった。今更どこへまた移ることが出来るだろう。キャンプをしているのではないのだから、ここで具合がよくないから、あっちへ変ろうというわけにはゆかないのだ。

古代人が持っていた知恵を持ち合せていないことが分って、大浦はがっかりした。これでは、古代人以下ということになる。

しかし、そんなことを恥じていても始まらないから、何とかこの家を大風で吹っ飛ばされないようにしなくてはいけない。自衛の手段を講じなくてはいけない。大風で、というのは台風のことで、それを大風でというのは、台風が来た時のことをあからさまに考えたくないからである。

家ごと空に舞い上って、その中には寝間着をきた彼と細君と子供がいて、

「やられた！」

と叫んでいる。

そういう場面を空想するのなら大風の方がよく似合う。台風では、そうはゆかない。

彼等が引越して来たのは、四月であった。木を植えるのにいい時期は、もう始まっている。うかうかしていると、暑くなってしまう。

そうなると秋が来るまで待たなければならない。まだ風よけの木を一本も植えないうちに恐ろしい台風のシーズンを迎えなくてはならない。
ところが、新しい土地に引越して来ると、まず差当ってしなくてはならない用事というのがいっぱいある。それをひとつひとつ片付けてしまわないことには、動き出せない。
前の家にいた時は当り前であったことが、すっかり御破算になってしまうのだから、仕方がない。ましてここは便利のいいところではない。駅から二十分と大浦はいうが、それは彼の体力と健康からいうことで、細君にとっては二十分なんていうものではない。
「行けども行けども、まだ現われない」というのが、彼女の実感なのである。
実際、初めてこの土地を見に来た時、どんどん先へ歩いてゆく大浦とあとからついて来る細君の間の距離はひろがる一方で、マラソンの一着の選手と入賞を諦めた選手くらい離れてしまったのであった。
そんな丘の上に家を建てても、キャンプをやりに来たのではなくて、これからずっとそこに住む以上は、何もかも最初からやらなければならない。面倒だから、省いておこうというわけにゆかない。
そこで、彼はある場合には、いま駅まで行って来たばかりでも、すぐにまた山から駆けおりなければならなかった。
なるほど、人間というのはなるべくならひとところに住みついて、一生のうちにどこかへ引越すなどということは夢にも思わず、何十年でもそこに暮しているのがよいのだ。それがいちばん

いい。大浦はいろんな用事を片付けるために山から駆け下り、駆け上っている間につくづくそう思った。

ひとところに暮していると、長い年月の間にそこでいちばん住みよいようにあらゆる努力をしているものだ。そうして、うまく行かないことは目立つが、うまく行っていることというのは案外、目立たない。それらは、一日にして成ったことでなくて、木のひげ根が邪魔になる石をよけたり、ほかの木の根の間をくぐったりして、何とか都合をつけて、水と養分を送っているようなもので、掘り起してみるまでそんなことは分らない。

家を引越すということは、こういうひげ根をすっかり断ち切られるのと同じで、そこがつらいところだ。しかし、そんなことをいっても始まらない。ここへ引越して来たのは、やはり引越して来るだけの何かがあったからなので、それはやっぱり縁があったということではないだろうか。それなら、前のひげ根のことを思わず、ここで少しでも早くひげ根を下すことを考えた方がいい。

大浦は忙しかった。無論、細君も忙しく、子供も忙しい。みんな新しい土地での生活の段取りがつくまでは、体も心も忙しい。

これまでは、上の二人が学校へ行くために朝早く起されて、寝ぼけ眼で味噌汁を吸っている時でも、我関せず焉(えん)という顔をして、寝床から出て来なかった下の子の正次郎も、いよいよ幼稚園へ行かなくてはならなくなった。

冬の寒い朝なんか、いったん眼をさましてから、「何も急いで起きることはない」と、布団から出した首をそっと引っ込めて、ぬくぬくと眠りをたのしんでいた彼も、もうそうはしていられなくなった。人生はいつまでも幼児でいることを許してくれない。

幼稚園へ入ったが最後、否応なしに小学校へ行かなければならない。そうして、どこへも行かずに家で遊んでいられた日のことをなつかしく思い出す時がきっと来る。

こんな風にみんなが忙しくしている間に、たちまち四月、五月は過ぎて、もう汗ばむ六月になった。

風よけの木のことを大浦は一日も忘れていたわけではなかったが、日の方が早く経った。それに彼には身すぎ世すぎの本を書くという仕事がある。あっという間に木を植える時期は終って、新しい家のまわりは、越して来た時のままの禿山であった。

禿山、というのは或はいい過ぎかも知れない。前いた家（そこには彼等は八年間いたのだが）からトラックの隅に積んで持って来た浜木綿（はまゆう）と南京ハゼと白木蓮がある。

それだけ持って来たというのは、みんな大きくなかったからだ。引越荷物が一台のトラックに全部積めるかどうか心配している時には、大きくなくても植木を持ち込むのは気が引けるものであった。

その家へ来てから植えた柿の木も桃の木も（どちらも甘い実がなったのに）、

「これまで持って行くのは大変だ」

といって、置いて来た。

関西にいる大浦の兄が初めて訪ねて来た時に、記念に買って植えてくれたライラックもそのままにして来た。ほかにもいろんな木があったが、柿の木と桃の木とライラックを真先に思い出すのは、あとになってから惜しくなって、

「せめてあれだけ持って来ればよかった」

と何度も思った木だからだ。

ところが、せっかくトラックの引越荷物と一緒に運んで来た浜木綿と南京ハゼと白木蓮も、それを植えて見違えるようになるというわけにはゆかない。それにいつも風が吹いているので（大浦は最初そう思った）、木はつきにくかった。

南京ハゼは二本とも夏までかかってゆっくりと枯れ、白木蓮は葉を少し出しただけで、いつも風にもまれて、成長が止ってしまったように見えた。

「これは困ったことになった」

と大浦は思った。

これから本格的に風よけの木を植えようと思っているところである。古くからある農家によく見られる樫（かし）の木がいいか、それとも椎の木がいいか。それよりもほかに、早く大きくなって、丈夫ないい木があるだろうか。

そういうことを毎日考えない日はない。ところが、風よけのつもりでない南京ハゼが枯れた。白木蓮も危ない。

日当りはよすぎるくらい、いい。この山に杉林もあれば小松林もある。百年くらいは経っていそうな大きな赤松もある。櫟（くぬぎ）もある。同じ山だから、土がよくない筈はない。ただ、あの風がいけない。

朝のうち静かだと思って喜んでいると、午後になって吹き出す。東京では春先からよく風が吹く。ほこりを巻き上げて、空が見えなくなるようなこともある。雨戸を締め切っておいても、ほこりが家の中にくまなく降り積む。そういうことは、前の家にいた時に経験ずみである。

しかし、こんなに毎日、風は吹かなかった。この丘の上では、それこそ強風注意報を出しっ放しにしないといけないほど吹く。玄関の扉を開けた拍子に風にあおられて、扉がどうかなってしまうほど、反対側に叩きつけられたことがあった。そんな突風が来る。

それで、関東地方にはこんな強風が吹きまくっているのかと思うと、新聞にはどこを探してもそんな記事は出ていない。どこの店の看板も飛ばないし、それに運悪く当って頭に怪我をしたという人もいない。

クリーニング屋の主人にしても、肉屋の小僧にしても、いつもの通りの顔をしてやって来るところをみると、この村でも駅のあたりは風なんかちっとも吹いていないらしい。

これでは、風よけの木に何を植えるにしても、先ず風よけの木のための風よけの木が必要になって来る。それがないと、木が根を下すことがよほど難しいのではないか。せっかくひげ根を出そうとしても、こうしょっちゅう風にゆすぶられたのでは、ひげ根が土にしがみつく暇がない。

かりに穏かな日が何日か続いて、その間にひげ根が出て来ても、また風が吹くとたちまちひげ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor